

## ルカによる福音書15章 「いっしょに喜べない人」

### 1A 見つかる喜び 1-10

1B パリサイ人のつぶやき 1-2

2B 悔い改める者 3-10

### 2A 生き返った喜び 11-32

1B 放蕩後の我に帰る息子 11-24

2B 父から離れた心 25-32

## 本文

ルカによる福音書 15 章を開いてください。私たちは前回、イエス様がパリサイ派の指導者の家に招かれたところを読みました。食事は交わりの場であり、その人たちと一つになることを当時は意味していました。ですから、そこには喜びと楽しみがあって然るべきでした。ところが、イエス様はその一挙一動を見はられていました。水腫を患った人が前に連れてこられて、その日は安息日でしたが、イエス様が癒すかどうかをじっくり見ていたのです。イエス様は直されて、そして彼らのその態度を戒められました。

そして食事では、上席に着こうとしている人々の姿を見ました。これも、見るに耐えなかったのでしょう。末席に着きなさい、そうすれば招待した人があなたを上席に連れて行きますと言われました。また招待した主催者にも、見返りのできる人ではなくて、見返りのできない貧しい人、病んでいる人、障害を持っている人を招きなさいと言われました。これが神の国に姿です。

ところが、そこで「神の国で食事する人は何と幸いなことでしょう。」と言った人がいました。けれども、その食事の席と神の国とは大きな差がありました。このようにして招待を受けた人々は、招かれても神の国では応答しない、なぜなら畑を購入したのだ、牛を試したい、結婚しているなどという世の中のことの思い煩いで祝宴には来ないからだ、と言われます。けれども、何もできない貧しい人、病んでいる人が招かれる。また何の関係もない通りにいる人々が招かれると言われました。これがイエス様の心でした。見返りのできない、心貧しき人々や、ユダヤ人の世界とは関係のない人々に見いだされることを話しました。

果たして、私たちがこのような神の国を求めているかどうか？が問われます。もしキリスト者の間に、また教会の中でイエス様と同じ心を忘れたのであれば、ここにいるパリサイ人の席と変わらなくなります。

そしてイエス様は、その場を発たれました。すると大勢の群衆が付いてきたので、弟子になる意味を教えられました。両親や兄弟、子どもたち、そして自分のいのちまでも憎まなければ、わたし

の弟子になることはできないと言われました。いろいろな大事なことがあって、それでイエス様に付いてくる、ということでは弟子にふさわしくありません。大切にしているものがあるとしても、それでもイエス様を選択しなければならない時はそれを捨ててイエス様に付いていく、ということでもあります。

### 1A 見つかる喜び 1-10

そしてイエス様は、パリサイ派の指導者とは対照的な、「取税人と罪人」との食事の席につきま

### 1B パリサイ人のつぶやき 1-2

15:1 さて、取税人、罪人たちがみな、イエスの話を聞こうとして、みもとに近寄って来た。15:2 すると、パリサイ人、律法学者たちは、つぶやいてこう言った。「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」

表向きは、きちんとしていたパリサイ派の指導者の家での食事であったでしょう。けれども、心の通えるものでは全くありませんでした。今、イエス様はまごころからご自分のところにやってくるこれらの人々と、喜んで食事を取っておられました。心貧しくしている、悔い改めている彼らのところで、交わりをしてください。主が嫌がれるのは偽善です、その反面、主が喜ばれるのは、へりくだった、悔い改めた心です。

ところが律法学者とパリサイ人は、このことを眩しました。ルカによる福音書 15 章は、この眩いた時の彼らの態度に焦点を当てています。三つの譬えをイエス様は語られました。同じことをイエス様は言わんとして語っておられます。罪人が悔い改めることにある、主ご自身の喜びを表しています。そして、その心を掴んでいない、主の心から離れてしまったパリサイ人たちの心を、放蕩息子の譬えを通して教えられます。

当時の状況を考えてみましょう。まず、「取税人」というのはローマに協力して、また金を貪っている者として、同じユダヤ人に嫌われていました。彼らに対してユダヤ人指導者は、律法を押し付けることもなく、いやもう既に神から離れてしまっているとして距離を取っている人々でした。「罪人」も同じです。罪によって神から離れてしまっていて、普通にユダヤ人に要求する律法を守らせるといってもあきらめている分類に入れられている人々です。

そして、「食事をする」ということが交わりを表していることを説明しましたが、パリサイ人にとって「触れる」ということは「汚れが移る」と考えていました。このような人々に少しでも触れるものなら、水の洗いの儀式によって身を清めてからでないと食事をすることもできません。ましてや食事を共にするという事は、同じパン、同じ杯を共にすることであり、最も親密な交わりを表していますから、汚れの度合いが格段に上がるのです。ガラテヤ書で、アンテオケで異邦人信者と食事をしていたユダヤ人が、エルサレムから来た割礼派を見て、一人ずつその席を離れていき、ペテロまでが離

れたので。パウロが公然とその非を責めたことを思い出してください。教会の指導者でさえ、設けてしまったこの差別であります。しかし、キリストは、その平和によって隔ての壁を取り除きました。

## 2B 悔い改める者 3-10

私たちが、これからの譬えで注目すべきは、「心」であります。人間的な計算や常識、損得勘定では決して推し量ることできない、失われた人を救うという心であります。一般人が見たら、「そこまでなくてよいのではないか」という、常識を逸する程の執着心です。

15:3 そこでイエスは、彼らにこのようなたとえを話された。15:4 「あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。15:5 見つけたら、大喜びでその羊をかついで、15:6 帰って来て、友だちや近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。

羊飼いと羊たちの光景は、当時のイスラエル人の社会では、ごくありふれていました。羊は、すぐにはぐれる傾向を持っています。そしてはぐれたら、主人のところに他の家畜や動物であれば戻ってくるのですが、羊はその習性がありません。けれども、はぐれてしまったら狼の餌食になります。そのために、羊飼いは必死になって捜すのです。

ここで大事なのは、「九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。」という非対称性です。おそらく、九十九匹は羊の囲いに入れておいて、その入り口を閉じて、それで捜しにいったのだと思います。けれども、いくら何でもこれはやりすぎです。人数的に考えたら、九十九匹のために一匹を助けることは理に適っていません。けれども、助けようとするのが羊飼いの心です。これは、一人の失われた息子のために捜しだそうとする親、あるいはたった今、一人の人質のために日本国民全体が何とかして助けたいという思いがあります。これは、ごく自然な感情でしょう。

ですから、特徴的なのは、一匹でも助けようとする執着性、そして、見つけた後に大喜びしている姿です。見つかったら喜ぶ、というのは三つの譬えに共通しています。そして喜んだら、今度はそれを他の人々たちにも喜んでほしいとする強引さもあります。救いの喜びを言い伝え、それを他の人々もお祝いするのです。

失われた者ではありませんが、五タラント、二タラントをあずかって商売をしてもうけた僕たちに対して、主人は同じように喜びを抱きました。「よくやった、良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実だったから、私はあなたにたくさんの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。(マタイ 25:21)」ですから、小さなことに忠実な奉仕をしている人々に対して、私たちが同じように喜びを共有しているかが問われるでしょう。人目に付くことを求め、そうではないことは継続できな

いのではなく、付かないことに仕えていくその姿を見て、主は喜びを抱いておられます。

15:7 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、悔い改める必要のない九十九人の正しい人にまさる喜びが天にあるのです。

これが主の心です。罪人が悔い改めることは、天において大きな祝宴が開かれるほどの爆発的な喜びなのです。エゼキエル書を読むと、「18:23 わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。・・神である主の御告げ。・・彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。」とあります。神は人を救うために、何でもしようとします。これが神の宣教の心です。どんなことも厭わずに行われ、実にご自分の御子をさえ惜しまずに与える程の、恐ろしい程の情熱と執着心を持っておられます。

そして「悔い改める」という言葉が大事です。罪人の行なっていることを受け入れることでは決してありません。悪を行なう者はその悪によって死にます。したがって、罪から離れて神に立ち返ることが必要です。この狭間の中で苦しみ、悲しんでおられるのが私たちの神です。私たちが、罪に対して安易に容認する態度を取るならば、神の心から離れることとなります。

15:8 また、女の人が銀貨を十枚持っていて、もしその一枚をなくしたら、あかりをつけ、家を掃いて、見つけるまで念入りに捜さないでしょうか。15:9 見つけたら、友だちや近所の女たちを呼び集めて、『なくした銀貨を見つけましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。

これは、女の人が結婚した時に受け取る、頭飾りのことです。この銀貨は一日の労働賃金よりやや高い金額のものですが、それを十枚使って、頭にかぶせる冠のようにします。先日、アッシリア人クリスチャンの方がカルバリーチャペル・コスタメサの教会で、イラク北部における宣教の働きを紹介されましたが、その時に牧師から民族衣装を着てきてくださいと頼まれ、それで出てきました。まさに金属片の垂れ下がる冠をかぶっていました。それが、彼女が結婚したことの印であります。その一枚が落ちてなくなってしまったのです。

それで彼女が必死に捜します。あかりは燭台による灯だったでしょう。私たちの家屋のようにガラス窓がたくさんあるような明るいところではありません。ですから、じっくりと隅々まで凝視しないと見えなかったのでしょうか。「見つけるまで念入りに捜す」とあります。ここまでの執着は、他の人には異常に見えるでしょう。けれども、これが神の御心なのです。元々、神がお造りになった被造物である人間が、罪を犯して失われてしまったら、ご自分の所有物を失ったのであり、神はこれだけの執着をもって私たちを捜してくださったのです。

そして、一番言いたかったのは「喜んでいる」ということです。他の人々にも知らせたい、はち切れるような喜びです。

15:10 あなたがたに言いますが、それと同じように、ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」

天において、神に仕える御使いたちがいます。彼らは無数におり、主に対して大合唱して賛美します。神ご自身が喜び、その喜びを御使いたちが共有しているのです。この天の思いを、たった今、イエス様は悔い改めた罪人や取税人が食事を共にしている時に、抱いていたものでした。ですから、パリサイ人や律法学者の不満はあまりにもイエス様の心とかけ離れており、彼らがどのような心になっているか、それを示すために放蕩息子の譬えを話されます。

## **2A 生き返った喜び 11-32**

### **1B 放蕩後の我に帰る息子 11-24**

15:11 またこう話された。「ある人に息子がふたりあった。15:12 弟が父に、『おとうさん。私に財産の分け前を下さい。』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。

この譬えには、他の譬えと同様、異常性があります。それは、父の生前に財産の分け前、遺産相続をしているということです。長子は二倍の分け前を受け取るのですが、この弟息子はすなわち三分の一を全財産のうちから分けてくださいと願っています。それで、まだ生きているのも関わらず父は二人の息子にそれを分けました。

15:13 それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。15:14 何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起こり、彼は食べるにも困り始めた。15:15 それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。15:16 彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。

本当に遠いところまで言ったようです。「豚の世話」とありますが、これはユダヤ人にとってはかなり惨めな状態です。律法で、豚は汚れた動物とされています。完全に異邦人の世界にいます。けれども、その豚の口にいる餌さえも食べたいと思うほど空腹でした。

15:17 しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。15:18 立って、父のところに行って、こう言おう。「おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。15:19 もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりになってください。』

17 節、「しかし、我に返った」が大事な言葉です。罪を犯す者は、我に戻るまでが時間がかかります。罪に拠って自分がどうなっているのか、盲目になってしまっているのです。このような悲惨な状態になるまで我に返ることができませんでした。

そして彼の罪の告白も大事です。天に、父に罪を犯したとはっきりと告白しています。それだけでなく、「あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。」と言っています。自分の罪の結果に対して責任を取っています。このことが分かっているかそうでないかで、その人が真実に神に近づいているのかそうでないかが明瞭になります。自分は神に対して罪を犯したので、神から引き離されたところの地獄に行っても仕方がない存在である。私は神の裁きを受けても、神は正しいですという告白ができるかどうかであります。そこまで罪を認めることができると、その後の父なる神の愛を知ることができます。それが分からないというのは、つまりまだ我に返っていない、自分には息子の資格がまだ残っているのだという高ぶりがあるからです。その高ぶりが神の栄誉にあずかれない、大きな原因となります。

15:20 こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。15:21 息子は言った。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』

羊や銀貨の譬えでは、もちろん自分のほうから神に近づくという側面は表れていませんでした。けれども、ここでは罪を犯した人間ですから、自分の意志が表れています。父のもとに行きました。これがイエス様が話しておられる「悔い改め」です。

けれども、「捜す」という先の二つの譬えにあった要素はここにも表れています。まだ家から遠いのに父が彼を見つけたのです。そして父のほうから近寄ってきました。ということは、父はずっと息子を待っていたということになります。息子が失われてしまったけれども、彼が我に返って、自分の意志で父のところに来ることをしなければ、救うことができないことをよく表しています。愛というのは、こういうものです。しばしば、罪を犯している人、何かの問題を持っている人に、何もしてあげていないのはどうしてですか？という疑問が投げかけられます。いいえ、本人が神に立ち返るところまで待たないと、どうしようもないのです。「何もしないところにある愛」というものがあります。

そして、父は彼に何度も口づけしています。ここのギリシヤ語はかなり強い形で書いておりまして、「口づけをしまくった」というような感じでしょうか？ 当時はあいさつで、いや現代も中東では男が挨拶に親愛を示すために頬に口づけします。これを、豚の臭いの残っている息子に対して行なったのです。イエス様の方法は異なります。清めの規定では、汚れたものに触れれば自分も汚れる、とあります。けれども、神は罪を清める力を持っておられます。神が汚れた者に触れれば、その汚れが除去されるのです。光のところに来るものは、すべての罪が清められるのです。

15:22 ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。15:23 そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。』

父親が受け入れるというところまでは、罪の赦しであり、神の憐れみでした。しかし、ここは神の恵みが取り扱われています。彼は明確に、息子とその資格の中に取り戻しているのです。手の指輪、そして足の靴はそれを表しています。それが、使徒ヨハネが言った言葉です。「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。(ヨハネ 1:12)」何も資格のない者、むしろ罪の報いを受けて然るべき者が、そのまま神の息子としての祝福を受けることができる、というのは私たちには決して理解できるものではなく、ただ主をほめたたえるしかありません。

15:24 この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた。

父親は変なことを話します。いなくなっていたのが見つかったのはその通りですが、「死んでいたのが生き返り」と言っています。そうです、これは飽くまでも譬えなので、ここでイエス様が語られているのは、「罪の中で死んでいたのに、悔い改めてキリストにあつて生き返った者になった」ということです。「エペソ 2:4-6 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、..あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。..キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」

## 2B 父から離れた心 25-32

そして兄息子の話に入ります。こちらが本望です。

15:25 ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。それで、15:26 しもべのひとりを呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、15:27 しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、おとうさんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』15:28 すると、兄はおこって、家にはいろいろともしなかつた。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。

ここがそうです、父は大いに喜んで、その喜びを他の人々にも分かち合っていたのですが、兄息子は、「怒って」います。一方では喜んでいのに、他方では怒っているのです。

そして父は、彼を宥めようとしています。父は彼も弟息子と同じように愛していました。この宥めるといふ言葉は、パラカオー、「そばに呼び寄せる、懇願する」という意味です。あの聖霊を示す、「助け主」のパラクレートスと同じ言葉です。

15:29 しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はおとうさんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下されたことがありま

せん。15:30 それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』

これがパリサイ人たちの心でした。そして、この思いともしどこかで共感できるものがあるならば、私たちの心も父なる神から、主なるイエス様から離れてしまっていると言ってもよいでしょう。彼は第一に、律法を行なうという努力によって父から好意を得られると努力していました。しかし、それは父の心から引き離す考えです。なぜなら父は、息子が何をしようとする息子なのです。そして、失われていたのに戻ってきたのだ、というその救いの喜びによって生きているのです。

私たちが、兄息子のように主なる神に仕える時に、これが弟息子のように失われていたけれども見つかった、死んでいたけれども生き返ったという救いの喜びと神の恵みに裏打ちされたものでなければ、その人はいつまでも不満から抜け出せないでしょう。キリストが満ち満ちている教会は、いつも失われた人が見つかったところにある喜びが尽きないところです。一匹でも捜し出して見つかったら大喜びする、その執着的な愛に突き動かされているところです。もし、その心と情熱が、自分の生活の中に表れていないのであれば、自分の行動や反応の中に出ていないのであれば、物理的には教会に通っていたとしても、心が離れているのです。弟は物理的に離れていましたが、実は兄も離れてしまっていた、失われた人だったのです。

そして自然の帰結ですが、弟息子を妬んでいます。神の恵みは、先のを後にし、後のものを先にするような、人の物差しでは不公平なことを行います。しかし、それは神の計り知れない恵みの現れなのです。神の気前のよさがそうさせているのです。ちょうど、悔い改めた罪人がいれば、天の御使いが神の喜びを共に喜んで、歓声を上げているように、主に仕える者は自分のことはさておいて、主がなされる業を見て喜んでいられるのです。神の恵みを受け入れられるへりくだりが、必要となります。

15:31 父は彼に言った。『おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。15:32 だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』

父は全然、息子を責めていません。むしろ愛しています。確かに父は生前にも関わらず、自分の財産を彼にも分けていました。すでに父の財産は彼のものとなっていたのです。したがって、彼は父の心を知るべきでした。父に愛されていることを知るべきでした。それにも拘らず、目の前にいる父の心を知らないという、実際的には弟と同じ死んだ状態でした。しかし、兄息子は自分が父から離れているという認識は持てないでいました。自分が正しいと思っていたからです。その正しいと思っていることが、実は福音においては致命的です。

そして、父は、「楽しんで喜ぶのは当然ではないか。」と言っています。私たちに必要なことは、努

力をして戒めを守ることはありません。私たちに必要なのは、父なる神の愛を知って、父の心と一つにしていることです。その愛と恵みの関係にある中で、それで父なる神に仕え、この方を喜ばせて生きることあります。私たちは一度、自分の心を調べる必要がありますね。失われた人々が見出されることに、喜びを抱いているでしょうか。そして、その喜びに自分が神の協力者として関わっているでしょうか？